



第3回「冬の小鳥」

—子どもの目線でみるということ—

川崎 二三彦

この11月、新刊2冊をほぼ同時に上梓しました（次ページの最後に宣伝させて貰っています）。というのはよいとして、合計800ページのゲラを繰り返し読んで校正する作業に追われ、映画もほとんど観ることができませんでした。今回紹介する「冬の小鳥」も、東京であった某会議のあと、まさに一瞬の隙を突いて駆けつけたようなものです。でも、無理して行ってよかったですね。観てしまえば、「あの時間があったいなかった」と後悔することなんて、殆どないですから。

「最後に一時保護所で子どもたち2人と面接した。置かれている状況がまだ飲み込めない5歳の弟と違って、小2の兄は覚悟し、けなげに話を聞くのでこちらも辛くなる。が、そんな感傷に浸っている余裕はない」

「こうして兄弟は児童養護施設に向かった。あらためて施設の職員に事情を説明し、いよいよ彼らと別れる時が来た。

『じゃあ、お部屋に行こうか』

と、声を掛けた瞬間。兄が急にうずくまる。ふと見ると小さな顔は涙でくしゃくしゃ……。それまで必死に抑えていたものが一挙にあふれ出たのであろう」

というような、児童相談所時代に何度も経験した出来事が思わず知らず浮かんで来て、胸が苦しくなってしまうのが「冬

の小鳥」の冒頭シーンだ。

映画を観にいくとき、あらかじめ多少の予備知識は持っている。だから9歳の少女ジニが、施設に預けられて生活するというストーリーであることぐらいは知っていた。私にすれば、自らこうした子どもたちにかかわってきたわけだから、決して珍しい話ではない。のだが父と二人、大きなケーキをかかえ、無邪気な様子でカトリック系施設の門をくぐるジニの姿にある種の予感が走り、私の心には早くもかげりが生じてくる。

「あっ、やはり」

「中を案内してもらいなさい」と院長が声を掛け、ジニがシスターに連れられていった隙に、父が黙って立ち去ってしまうのだ。1975年の韓国。

とその時、こんな声が耳の奥で囁いてきた。

「長く働いた児童相談所で、こんなことはなかったと、おまえは本当に言えるか？」

彼らの前に児童福祉機関やソーシャルワーカーは登場せず、父が直接ジニを施設に連れて行き、預けた後は全くの行方



知れずになるのだが、そのような事情に至った理由を、映画はなんら説明しない。あとはもう駄目だ。

「なぜ彼女はここにいるのか、あの優しそうだった父は、どうして彼女を置き去りにしたのか」

ソーシャルワーカーだった身が忘れられず、つつい事態を把握しようとし、いつまでもそんな疑問に拘泥するので、ともすれば映画の世界から取り残されそうになってしまう。

一方、突然ここで暮らすことを余儀なくされたジニは、すべてを拒絶する。

自分が持ってきたケーキを食べようもしないジニ。「パパはウソつかないもん」と言い張るジニ。ジニを指して「お客さんじゃない、私たちの家族よ」と囁きあう子どもたちの声を聞き、泣き出すジニ。ついに門柱に上り、飛び出そうとして立ちすくむジニ。そしてそして……。

預けられた施設の職員やそこで暮らす子どもたちが、存外にジニを暖かく迎えてくれているのは、観ていて本当に救われる思いがしたのだが、それにしても、次々と映し出される彼女の行動、彼女の姿を見ているうちに、鈍感な私ではあったが、はっと気づくことがあった。

ジニの絶望は、単に父と離ればなれになってしまったという事実にあるのではない。なぜ裏切られたのかということすらわからないという点にある、つまり、自分がこの施設で生きていく意味を、必然性を誰にも知らされなかったがゆえに絶望するのである。

そう考えて、私には初めてこの映画が何を言いたかったのかがわかった、よう

な気がする。映画を観た多くの人が、「子どもの身の丈の高さから描いた作品」だとか、「カメラはジニの目の高さと同じ位置にある」として高く評価しているのだけれど、私にとってそれは、ソーシャルワーカーの立場からではなく、常に子ども自身の気持ちになって考えよというメッセージだったのである。

理不尽な大人の仕打ちを甘んじて受け入れるしかないジニが、懸命に生きていこうとする姿。そのジニを寡黙に、しかし見事に演じたキム・セロン。それらが一体となって、本作を今年の秀作に仕上げたのであろう。

(鑑賞データ：2010/10/17 岩波ホール)

「日本の児童相談

－先達に学ぶ援助の技」

川崎二三彦・鈴木崇之編（明石書店）

2,400円＋税

7人のプロに聞く幼少時の生活史から対人援助の神髄まで。

「子ども虐待ソーシャルワーク

－転換点に立ち会う」

川崎二三彦著（明石書店）

2,800円＋税

生きづらさをかかえる現代の家族、児童福祉世界の激変。私が自ら体験し、生きてきたこの時代をまるごと捉え、形として示したいと考えて編んだ480ページ。

著者はできばえに納得。皆様、是非ともご一読下さい。